論語一統 卷之一

2,000
1-2

13
2000
1

唐本和本御書物御経類江戸折巳
石刻法帖 淨瑠璃本 折手本 狀袋くろ
御進物用 はな越後本 萬貸本 出板仕立西曲 好次第仕人
右し通何書物ならびに賣買仕れ御入用ゝ不申上れ
直段格別お安くいたし申上れ
なお諸仕立ならびに表具仕れ
ものおとかぎりに出用向ゝ経師屋
大坂心斎橋
南本町西へ

宝玉堂
川崎
図書

續一休

前編一休ばなしは世間に書れし一部にて食と酒物語のおもしろきやはり寺の住職一休和尚の放れおしてやさんと。時の菓物語を絵り貫とく面白うしまく。雑紙の湯ふものは一代の戯ハ物集よみとくに堅さ弁るせふ耳近くいふ安さを拾ひ集めし一集を尾ゝ全部かなりこそ書れは誠ふ手ねよ達ならぬ一代のものせまづ此集の奇妙幼くまくしは今の發明橋を橋まの蒲焼の干鱈ゝ淀さう鯉の引乃手或ハ美の地蓋の開服えん朝の夫天蓋大柴ふ大ふ美を遍剥し。ぢ枝の山でハ岩ゐ樵柴まくのゝの子ぷる那の山ぐハ山那の汚ふ拍小

つけ事よろこぶ。秀句の狂歌なども。強く評ふるふも脇
ふしぬまぶかく育ぐくまきを集め面白きを求め愛さを和
らげ枯きを尽くして。皇軍ようけ兼ね敷して一編の奇
異あるを世に廣くろろ人の目を驚ぐわ耳人の耳をとく
穿つの集さうぬまうまぶを面白きのまく賞愛しもかく
讀尽せども更ふ分ふ有さ〻〻祢ぶ或ハ都の花の友果の
武蔵の月乃友愛の市立かしこの歌の茶合ふも只氣物心
よ住まく。一休和尚の心狂俳。面白きぬハかさやと。人こと人ふ
よまぶハ世和尚の乃ろをのく。根を抜く耳ハ古の前編あく
まぐうく書れ〻ハ〻ども。何ぶハこ〻ハ〻ハ〻ろ。ぶ〻〻
ろ〻〻。願ろ〻ゆやかの集ふおざろれ發明の狂俳ぶ。さ

く半人くも。ぶ面白き事のく。ぶも或ハ反故の裏紙の端ふ事ふ〻ろ
ふ。と一歌の目覚し事に。ぶ〻〻ん祢ぶ。ぶ〻〻ゆ。ぶ〻ん狂
ぶ。ぶ事繰りて。無ハ。法ふ事ぶ。ぶ〻ん。ぶ〻の集ぶ一休
の意味をよく文ぶ。ぶ〻人嘲鳥の文を加人面白く半ぶ〻〻出
る。ぶハ文ふ。ぶ〻ハ。ぶ〻ふ鶴ふ。ぶ〻ふ鷹ふ。ぶ〻ふ鷹ふ。ぶ〻ふ
の遠ひ。ぶ〻て編集ぶ。ぶ〻ぶ〻ぶ。ぶ事ふ。ぶ〻て。ぶ〻ぶ〻ハ
ぶ愚ぶ。ぶ〻の怪。ぶ。ぶ〻ハ。ぶ〻ぶ〻ハ。ぶ〻ぶ〻ぶ。ぶ〻ぶ〻ぶ
ぶ。ぶ。ぶ。一休和尚の狂俳。法則の物語を出ぶ。ぶ〻ぶ〻ぶ。ぶ〻ぶ〻ぶ
力のぶ。ぶ。ぶ。

御遺德しるあらし。性こと葉を尽く。深まり小編集せんとす。
処々の話も拾ひ集めて。好む所の仏を仏をかく又續一休咄
し題号しく世の人の笑を待のみ。ぬ一休の有趣味意よ
あらじ。耳たうりやの無筆の業所ぬるもいと
大概ふ見るくむくやしくく賞ゆ愚あるを悪ず辱なる
を拾ばぬ老和尚の遺德を信事あらはやしくしのみ

享保十六辛亥穂孟春初旦

編者
也来

續一休咄　巻之一目録

○一休いけあきは登ぬの事
○一休和尚活則禁令の事
○盗人一休和尚の御才子となる事
○一休和尚形人なる引導の粗言を作る事
○嵯川新発ら一休の法へ遣て手紙を書する事
○一休和尚放下僧の絵
　英清花大下の絵る歌の粗言を書する事
○一休和尚狐の妖怪をあり祈する事

○一休石火風雲の事

續一休ものがたり　巻之一

○一休幼さ時発明の事

一休和尚幼さ時より学問の人にかくれなひ利根発明なりし
こと、所の僧坊養叟和尚の許ふれくせし時、ひしもの千月の
末極暑地とにき法水の風もけなめるゝ。ゆえ天誠ふ
火のごとくなり打ち。ある位の人。この養叟の坊う
らうんげふ。を行へ。坊中立稚ぐさ。南表の客座の陸よ
も意もゆのけ。ちるのさへ。清じ。座あの松風。水の流
柳の蝉を。答義ふ。納涼をすくめ。ゆ。そのうへの所
池をふ。ふ。たさある所よりの菓子。の中へ。くと入れ。養叟
すくるを。一休小さ時より。力ゆ。もるゝ。経ふくも。ゆ。ふ

目ハふんどかなんぢく　お行ひ時の高位の人あく小位あぶ
と行をくれるおそのかゐの下よ。座敷の真中へどうぐ歩
義一休も水もとてうあらうへ流まうらう。座中立強き
彼もとして。涙と座流りるを。ぼん高位の人の口おと輝
ま膝くく歩義さ引ーゆんとゆくどみかるさんハ一休ハ
ぼ物揚ーゆんぐる位の人の御意あぶあーと出れー
お目続の羽を高ゲーみなのすまーとの初り男四人無くく
ハ。歩義さ引ーゆあんといひーが果ーく一休のかもその
意越ゆく有りとりけん。

○一休和尚活則返答の事

賀義の里ふひと賢ーき男ありり。西の京よいさくの高

人みりるまーそれを影ひ。ぎーゆ歩かくくひ。それ分ようさ
沢ようく。紫壁一休の高小立ぎーぶ。和尚も杉ー寥
然ーて只一人。花義葉を観ーぶ。ちるの周縁有室
室の杉の崖ぶを流ーゆ時の人その抜ハ歩くん時言
ゆもーさーぶ。ハいさくう用のるあり。西の京まくこれ杉り
席ーおぐーれせくそこ。立ぎーくーを。ぶひまぬハ
流沢ゆく人分ーまく。お風ゆもと義ーき醤栗の玉二な
とりーおすぶ。和尚意しの程流ーぶ。ぶのうーゆくれ。り
扱ひ杉ゆ内ぶぐーて。ぐーくくと花散ぶ。ぶーう
ぎーく人。命の毒と思ひ。流ー醤栗ハ第ーき玉ぶう。雲雨も
すさ泳ーう紙作ーて。ハ和尚いや見ゆくう紙玉ぶ

しくやうく一首をぞ

いろくの名利のくれがちなるをぞ
まち坊主あもがんざんハすぎ

うくぞ千くの面白くをぼえぞのあの人もさるふ
ぼえ一枚の歌をぞ詠ぎぞ法師の一首を詠うぞ湯りを
さ花しうぐ面目ゆく行うしぞそれなまぐく雑波の
物ぞふぞ彼人ぞ和尚の善知識ハぜふかうまぐ美う
ぐうぞのをりくかく分明よハ見分ちぞ行ぞんしぞ和
の内ぞ明うある物ハ見失心眼しぞ答ぞよぞ家のく耳ぞし城
小ぜ四つよそうく事ぞ一句の内ふかく法則の當流ぞう
ぐくも殊勝ぞえぐ狂ぜうぞ人今一向ぞぐやしぞひぞ

そうえよるくし火鉢をぞ天目の縁を叩きぞ茶碗
が鳴ぞぞや火鉢うぞれりやし向ぞうぞ進ぞ和尚ハ遠ぞ
ろがぞこさやぞ鳴が早こさやし答ぞ人ぞかの人ぞ山一句ぞ閑に
しぞ法ぞ狂ぞ言の発明ぞ希代ある法僧ぞ法縁ぞいつぞ
見ぞうぞ多ぞ他意ぞなく湯ぞ仕ぞしぞりぞしぞうぞや

○盗人一休和尚の沖ぞ才ぞしぞ多ぞ事

千なの花ハ和州ぞ一ぞの本ある縁ぞを都ぞ遷ぞしぞふぞとの
桜の名所ぞその道ぞ近ぞくぞ世ぞ移ぞしぞ名ぞ木の盛ぞも。泳
ふハあうざれぞ。ぞ東山祇園清水の花ぞ法人のぞうぞも弥
ぞうぞ人ぞ盗賊群集の花ぞんの人ぞ多ぞうぞくの張ぞ一休も
西山ぞ山ぞ行ぞさぞと立ぞ名ぞく下川原ぞ立ぞ多ぞ行ぞ法

愛しくさすりひいてきかせてこしをかけ
打ちぬいてうねりくねりこのけそこの人
人ぶりをぱひとをもけく見ふ角をいまく
俳徊りるを一体はくしまく見ふひこのをすでし
氣を付ふよ人の中ちふ腰の四りを神ひさ
ちのびもかりばまくやらくしすの中着切まてぞ
ぎりる。和書はよりしとちやくしまくる。細いきやつい
生性のいりぬ高貴をする。盃寸ちやんいふものこそ
有りるよ。寸ふ一瓦。人並のまれ有ふ人今ふ。ちも続
しうぬ身の不便ふる仏ぐふ。ご教行く北ふ
もあ主どから人中ぐ主昌いぐ。又人をや見有く

部くその身の餞しるべ。ぐ。もこれず。而捨まづ一首と
ぞめ。それ。く第一合点をす。べ。その身の德。發起
の基ゆ。をあるまじき物ゆ。もかし。。おく懷中ようり
筆を。。。。首を。を。く。。の。。。の。。へ。。ち
別。。。ひり。。。。と不思議。。。ち。。。。ようり竊。
拔。。。れば

ぬ。。。。

中着切の得度しまする。禅法門のくぐり有り

○一休和尚死人を導の物言の行くる事

一休和尚東海一見のため。都をバ発とて立おなりひ。秋風の吹ぬさきに。はしも皐月の末つ。京へとて。ゆり行よ。遠州濱松の宿も今すぐ。天龍のほとしに。味方が原の古戦場。家かこ。おろん行よ。内ぶ。日も暮ぬ。あの駿河の国。夜を明さまし。杉ぶし行よ。並木の松も。ぶ。樓梅檀の張。ものの。濱しを行。思ふ。人家四軒。青しぶ。藤の。ひのか。焼しくて。河の。を便よ。近行く。行脚の僧。ゆく。行りん。一夜の宿をし。乞やり行よ。あるじの男ハ。庭の。湯ふ一つ。

祢の。菜を。ゆく。ゆの。の。つ。書し。行ぶ。しをハ。ふ。杵。ゆく。こ。し。ゆ。を。掘。ゆ。ゆ。ハ。掘。店。ゆ。ゆ。今。一里。行。ゆ。濱。松。ゆ。宿。ゆ。ハ。行。人。ゆ。ゆ。ゆ

子の然敬ぶ切なるよ〜ゝ物語すれハ和尚ハさろ〜ばゝもで一
樹の陰の宿り。他生の縁あり。拙僧行く法なりとも。
ゆくさきゝ〜と行く道。ひろゝの男を連く。藻へ行を行よ
よ。亭〜主ゝくのよとひぢ味をも接り行くといよ。かの亡者
の妻。これハ有りひもよ〜ぬ者うくき者の縁うるゝと收びぬ当
をバ清〜て。拙一休よむひぢ。ぐ〜わゞ妻ハ。ぢ不の
百姓ゝゝの田地を俳り。世をいく〜ゝ〜ゝ。父母ご人まゝ
ゝゝり。十とかゝらふ子もこゝ人ぐゝ。ぐゝハ浜世の便のたゝぬ
ゆゝ人〜ゝ。ぢゝ〜ゝ流〜。穢の言る縄の〜〜く鳥をゝゝり。他
来の人よ代ゝ〜。又或ハ山川の年魚をゝり。寄くおくハ打
ゝ〜毎の魚をゝり。親ゝくゝをおりゝゝゝ人の殺生ハ法の

世の別の行も打ちゝ〜〜ゝ。世て他まゝ罪ハ須弥山ゝも
打ゝ〜〜。芝ゝ〜で世法ハ打きゝゝゝ物法まゝ〜き境界ゝる
と詢ゝゝ。ぢんとゝをゝてんがはゝ〜〜ゝ。他まの寸ゝ
まで。毎ゝ〜の殺生。拙ゝ氣よ。拙ゝ〜ゝ。ゝよ行くもぞ。ぞ
いひ敬きゝ〜ゝのヒの階級の刹ゝ〜〜。法よ切ゝの法の際ゝ。
えんゝゝの百姓ゝ〜殺生を好む悪人ゝも非ずおゝゝも氣も種
姓のある身ゝ。ぢ。沢ゝ〜〜。冬蓋ゝ。百姓ゝ打場ゝ。
うゝゝゝ殺生の業ゝ。親ゝ子を打ゝゝ人ゝ氣ゝ法よゝ。ゝ
ゝゝ結縁善加徹の一遍の四向ゝ。ゝゝ打ゝゝ。
ゝ社安渡の願ひゝゝゝ。拙ゝ悔敬ゝ。ゝゝ他ゝゝ
ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ敬ゝゝの打ゝ〜。ゝ縁ゝゝ

くてさゝれ勸く一句をも授ぶくべいの半永くをんじをもらんと
世ふを哀よ憐るまゞ。一休もすふ仏衣の神をぬゝされ妻女
よむひ作るハかゝる浮世ふすむゝハいの命の身も相應よ
罪業のすきゝいよゝものハ一ゝ發起しいてこそ
言のまのめゝ。ゝ世ゝくゝの罪業をおそんゝいゝ。命も合
点ゝ時後めも生ん非を悔ゝ。ろの一ゝ志ゆくゝとくゝゝ世のつみ
消滅すゝ。ものゝ。ひゝゝゝし極楽へゆゝる繫をバ授くゝ
公要くゝゝれよゝ。ゆゝハゝゝ。ゝず一筆ゝく。ゝ者のゝよ授ゝ
を葬れゝいゝひ垂。物ゝの内とゝくゝすゝ極ゝよ。ゝの一筆
のゝ安く。ゝ。ゝ歌も未ゝるゝもゝ妻ハの妻の女一筆の宿の文
ゝゝも顔ゝ勝ゝ。和尚ハ京へゝゝを行ふ妻ハ姉ゝく者

ゝくて教のめゝくゝの和尚の一筆をゝ者ゝ授ゝを乞ゝゝ。ゝ
重れ侍ゝゝゝんいよゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝ授ゝくゝゝふ。者
の物ゝをゝゝ。ゝれゝる

一ゝくゝをくゝつみゝゝゝ

おろく。極果報の亡者なり。是ハ殺生ふもちく。都の西出家の
一休和尚の門ぜん迄。その門ろうをとゝのへ。よみける一首
を接りて上ハ。即身即佛の法生。有がたき。善縁なり。沢
山ひぐさハ亡者と。感涙を流さるゝ。書も物ゝ。殺ひ
を嘆ゝて。信ゝ。ゆく。殺のめく。蓮ゝ。ろ。かゝ。ろ。すをば
佛ハ入逆をも捨ず。てうび。奉契の善果ハ。一味の雨よ。蓮
を生ずといへり。しハ。ら者のまゝ。ん。ぶ。ら儀
あり。結縁ゆく。有ゝ。ゝ。き。引導を。極ゝ。ハ。流よ。半ゝ。げ
布ハの例ゝ。ゝ。ゝ。

ある時彩女ろくさまありて。私儀じ。為ぞえるの便宜に。
のもとにわらべをつれてゆき者。家くの物ひとりてくしいこ
しんどもつるとなく。相果。あはれ人もなく
しんぱくもあらうに二親。嘆くなくみ抱いてしたの面影も
見べき者これなくさしく活計よりはかりなくしも老たの
身のせ話を後さんとてきぬ。ちらくしくしく後ひとくしく後
幼サ方に京をそだらかく旦那ぐ人もなくろおお入住り
れ親のくらいをもあく賞弁のれ思まかり。今更生まつりく
ちき暮屋住ひのもとあくしくしくしの御紙付ちなに
場くきのどくまハをんじんせ。又くられうる二親の
るもかくくあくくあ近くくあ菊地を住屋ぞあくくあ下

ちさくのりこそのうくこれまぐれ新んぬ比よあくく下さ屋
私あ人今まさ輝ぐくかれ私くくてくぐんくくれくハ月比
常垂一千物まくちの旦那ハ世ろ廣ふまくまくもなば
ぬくくぐお河を涙くくあ垂ぬ垂くくよ賣れくくうきくことの彩び
新左ろハ始終をらくくとぐけくまこ彩ぐんの抱屋の
屋流る終義もるさくあればくくてハ盛まくぬいろ屋ん
末なくみのくく方殘ぬもれりくもぬくくりも紀者氷と
ずいるぬ尾くく京を住屋揚ぬ比ぬ下くくぬ
買垂一青色くくも賣れくくさくの彩ひぬこれ大徳ちの
一休れ者のぬ方へくきくぬくくあ賣年てゆくくすべく
と落合れ。線れ者のくく人ちの屋ひきくんくぬ流と

ちゝめよ鮫り。ゆ〻しかりしい行くゝ。やゝく呉ゆ〻きさん也
無ゆ〻しいぶ〻ゆ〻ばわさゆ〻ゆ〻て。ゆ〻ゆ〻の氣物をさゆ〻ゆ〻
〻。青ゆ〻の一ふゝく。速ゆ〻ゆ〻ら人ゆ〻ゆ〻てゞゆ〻ゆ〻れゆ〻る

いと

一唐の乃ゝ法ゆ〻十四丁
一祖師ゆ〻遠ゆ〻の一巻
一節ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻の巻
一ゆ〻ゆ〻ゆ〻

ゆ〻のふゝく。ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻ゆ〻

の畜生のく殺害やもかく今更ぐ〻ぐ〻世の例
ゆもすず。ぜ怪ととくもみてまじきこと殺生大法禁止と
又いわく殺生は社ハ杉もくれりゝ。その時の事和の数多く
よ多ゝゝまこ。徳の報もまこ数多ゑこゝゝ。法ハ能耳ゝ
ついをゝゝ。ぬ。有ゞ中ゝ面白く一耳曷ゝ。ゝ。ハ
云載仏ゝ

○一休和尚放下師の絵

并 禅堂大臣の法よ賛の粉ゑを書ゝ

或堂上の公達。少ゝ。ゝ。法ひゝ。上ゝ。放下師ゝ
ゝゝ。見物をゝゝ。ゝ。ゝ。

ちかごろ人のらひしは
つゐとこそ人さへくなりぬるを
と一首をゞ書くしるかの人世よ特しくおもくなりて
家の寶と一入大切に成しるゝ寶ふ又八九部として義
世智さかしき四方同様ひの人を沙ひ一幅の畫賛の
ものと拵一体の高宝とまり和八京の町人質高貴を
仕るべかりしとも者ゆくいかぶ和当へ右易ゝ上てさるゆる
見まで系上いかしいをゝ也ば和当し杉ぞしく
かるをづくるの傳立出沙ひかのこ人を奥へ通ぶ絵の
用ふらしるかの八九部懐中今一幅の表具を
おしぶ見ゆるしに和方へ一物をべき拾数の質物ゆ入

ら書ゆ人畫の義八不案内ゆ人とも。ば賛和当の出業
他しさるゆ人ゆ相沙いかば仁とハ月沙ゆこの中
の月限もるゆ人ゆ相遠も五ゆくそんじたの今ゆ備ゆいかる来
洞ゆ人ゆ人ゆ賣拵くるゆ中さ出それ他人
見ゆ人ゆ絵ハ米衣の出賛の沙
雁貝業ゆくゆ大の元金拾数ゆ人ゆ八ゆきは
ゆ出仁ゆ人ゆ仁ゆ人ゆ物を出の数
さるも他ずゆるゆ加ゆ出ゆ家ゆ人ゆ
拵ゆ和当出賛の沙ゆ絵ひゆさゆ。是非のゆ人ゆ
出くゆ右易ゆ雁貝ゆ正真ゆを紀すゆ人ゆ

今ぼんやりうらくらの一幅をかけおすと。和尚ハ立て、
ゆるやかに。清旭大師の詩を。
をうたり。上ハ一首の詩をよむ

鍾道振鬚晩風涼　執扇仰天蝙蝠翔
同氣相求斜日急　蚊歸林下客歸堂

和尚後の神。翼のやうをつくりたるに。奥
へ入。良醫ゝてまこと。おてゝの八九郎よりむりに。
演旭ゝ。ゝ。ゝ。ゝ出来たるの。賛ハ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。

られるるぎ。いよくみるかく。係ようぶ身の杜れるを
耐く。伝をる涙〜第〜すぐぎ。比法の鬚パぶ初ん法の
薮醫の紙文なりしぶ。伝しぶぎ和当の鬚を祭ひしく
日比の鉛をる逆ど。賛とやさバ角やすく交がる世法
ゆまじ〜そんじ。比仁しの相侯ゆく。和当の山筆他の質と
鮮く福を設けそのうへの山加筆を形くんくめが抓る八ひ
しふぞんずる座の仕合ゆく。有かるきに一首。応和当を逆
偽〜ひしる。勿神玉極もるくんども。畢竟山鬚を形ひ
のゆ人ゆるも臓脇る。罪業清滅〜ちバ。偽の鬚を見さを
ら星〜と。涙をなぐ〜てゆすの時。滅の一体禊障子をいけ
立ち法ひて八九郎よむうひ。いるふ八九〜ぶ。方立ぜん

是〜ありしぶ。ブ人ぶ工〜。比畫の物ハ論ありと杉りひ
ゆぶ〜ろ〜ぶ。ブ〜ぶ。芸宣ろ。ひ付。舎釈ろ〜ぶ。重ぶも
生まぶき事ゆもる。偽ゆも偽謀ハ夫のゆくしぶそ
の舟ハ冷ハ通るまじ。塔くハ少ゆくもろ生ろ知遠。ゆ
うの者の目をぬんとハ。ぶ見ん。その行ぶそれハ目
ぶ実偽ゆり。ぶ〜一体ゆくるさといくぶ。たとひ乱花。
ゆりしも。ぶ世まぶも向ゆ。ぶゆ〜ぶ。惜ゆ偽人ゆ立べし
と立ゆ〜〜。伝〜れ又禊をる〜〜引立四人ゆを伝ゆ
ゆで。体の八九〜面目もなのき。ゆゆ成1地龍の気
を〜ぶく元統の遠ゆるを何んとハ。ぶ比今の事ゆで
と。独と目ぶ見ん。黙伝〜〜てゆ〜ぶ。天宣空稼吟ゆ

つゞく身の罪業を懺悔して頓んとすれども天竺にも行
しくぢらくの不孝ばかりしかるこのおおよそ仏の法恵もる
きまつ。和尚の出家合を。盃をつゝしおゆりて。第六
て奥へぞ入られる

○一休和尚狐の妖怪をさりなすこと

はしもさぐれのつりこみずしゝ千月の十日紙ぶたの
休しきれるゝ。一休和尚妖怪縁よ立ち張ひ四方山のう
きを称め公を懲ゝ張ふ不信者りてやるハポ
川をつり楽井の行ゞ与こと。主の四を与ふをゝ
則口この与紙もとて内おすを。和尚やゞく蓋をさり
てゝ行ひ。えんのめゝ立ち張ひ。侵よむりひ。ひ

あるこの音信よく社人を行くりさり法文今めづらしき
事の内ごろ猟ざし漁るこそひハ雅も面いひか
ら人もなるるしハ宵のうち来りて出されるとも
法ふく作るとく作られ使をハ見てこそ出ぬ僧同菊本
ようそもホ川の深井の伝ごとやりんハ雅るれバいま使
をこそられ人ぞこと聞よ歌出る来るれしとつめホ山
ざこそ人ぬ人いうホやしと影ひるる。時ホ奥の弓ホ和歌の
おまの唱るるまやうて小伝来りるる。一体作るハ来ま
の伝ごち辰富下男さまで一人も残らず。笹来へ来るべき
うの作ぬこハ作るすやりんとおりひおごーぬ皆く奥の
弓ホまりしホ和歌ハ春宣よむひぬ山中境の町人

福源やの伝ごとふく来り河童の為ごとく人今ようよ十数
作ごうそもホこその方へ行けこそハ是へ指来るるよホ伝
その方よ頼げ垂さる垂ハ是へ指来るるよ衣ホ山の確山
居士のくれ来ま一伝衣入の杖とぬこうて来よ同菊よハ深
波の玉の旅伝ぬ古産の海苔ホ山の徳源屋より送り
一徳利の酒券よ紙屋川の名ぬ年中不退猪の赤茶一
俵ごとく方おの方の内ぬ出ても是人をて来れるの
ぬる面く作の垂こしくくうれ集ホ和歌のおまるべ
をく一体作るハ皆いづれもの音ぬ七文の物ホいづ来も一
つきまりたのどもんぬわどあそこ家ようとうとかん不
をなどくこうりぬ是一つとして正真の物まあるぬまづ

その宮の四を穿くて又よ打見るよハけるゝぬ。艾の餅とゝん
ゆまでゝもそれをバ家の泉水へ投てゝゝ人〳〵と居りるホホ
僧立くゝゝの面。泉水へ打ありしハ。伴の茅餅ゝ青蘋
しゝ。ひゝのくゝと羅汁ぬ。昆布とゝ切をつゞせバ。体ハい
やこれのゝにあゝびその面ふくゝ。いづまでゝくのめくゝる
べゝ。その金ゝの封をゝいてゝゝ。ゝ切るホホとけハ
秋の風よゝち。椋の葉の茅ゝゝ。貝殻の紅葉の古ゝゝ
それゝゝ。源波の涙海苔。昆布同ゝく蔵葉の塵とゝゝ
ちゝゝし。玄蘇の菓。雲つき夜〳〵ゝ。ゝゝ。つゝの茅布
面ふ打きゝゝるふでゝゝり。杖ハ播紫竹の祝ゝ切ゝゝとホ
薬久の袋よ入ゝゝと又くゝ。芋の葉の細き茎を指茅

のゝ紙よ包ゝゝゝ。ゝ漆利の酒ハ移ゝゝゝゝ
茄子。いつゝの面の清海りの。廣ゝ絞せゝゝ。ゝゝ
。俵の精米とゝゝ。紙屋門の流ゝゝ。ゝ。ゝ白
の袖よゝゝ。ゝく〳〵。名刀を濃ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
はふ和書ゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
れハゝ寺の六丁平西ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ久ゝくすむ猫。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
。ゝ。ゝの通力をゝゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
の軍。ゝ。練の微才を。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
を昧。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

四狐の。禪法を法んとこの石室に来りしに。
小川谷の後にいひしまを。青八清る友もかりしが故隣
あくバ茅り法とといひ申ねの狐すぐれたるが因工を加
施主をかくと。物不くを送りしを。我邪悪を懲こ
細の其心を怪あ凡欲よかくてる。正しく邪乱の手作
茅授堂すを形んて。茅りんすハ清堂こ。ア出バその時
ぜんの方便をアムすうる氣更ゆ。かりく社ハ来べと
給れハ。吾室をそぐあ。是ハきそうゲ。人ハ社ハよりべ
ケ。此和尚の先知を言了ば。正が形氣と形く禪法
試こ。廻みあふせんとハ近此ゆくき不者うるし。ぬく
日の茅。この狐物の茅りを。ア。まこと社ハ待ケ。すぐ之日

も茅。今やそれかうし門あの人茅ア。よくすをも待ケうしふ
やうりく和尚もうくるとバケ近くもりア。和尚も塔ケ間もなく
ノこ眠を催し。坊中こそり。狐もうの狐ア。和尚のケふの
ケ愛の独獄を悟りア。和尚ハをを来をこれ寸ば有べし
祝こ方ゲ塔ケんこ。和尚のおおを了こ。ケふの男人ア。和
尚ハきケと茅ケを私こゲ子のこ待すこく待べしと仰ケ
ケふ和尚の撞の声もはくく業狐こう形ケ陳ケを
そケこ引あけ。西こゲ不茅ケ人ケ。人ケ。すこやこ見を
什りふ。ア和尚こそして。黒き布の道服をアんこ白結
末乃こを冠髪ふく眉こ。ア。ア。ア

しかるに一休法弘は禪法を愛ずるゆえ故に渇世と離れ塵
界を空に觀じ塵埃をさり澤を住すと云へども
さしもの公法喜怒哀樂の物憂し温冷暑寒の
物事まつけ苦んで天の春雨ふる不見の公事ゆえ
ハ花ハ赤ゆえ白人ハ風をいとひ月ハ行よやどるゆえ人ハ泄
風を嫌むゆえ彩花開ゆえ枝滿月すれば合ゆえバ乱
咲くも水濁るも是ハ更に所縁ゆえ咲かゆえ悪ハ
乃の異兆を極むるゆえ形ハ人神魅の障碍も有ゆえ
森ハ異へ西南ハ冊の森に実の神ゆえ
すべて妖怪の出物をまちねゆえ益の図書を費さんゆえ
ゆえとふりく點正くゆえの野千ハ神あの示をまんゆえ煙カの

乃を對ゆえ主吳形をこ流し海を河をかくす有をこそ
物ぜハあんゆえ邪正ゆえ乃の
をゆえ合人くゆえ多くゆえ実のゆえ
ハ骨髓ハ赤ゆえ美ゆえ和ハ
ゆえ川の何ゆえいつくゆえ益
ゆえの人ゆえ出来ゆえ貴原の天神ゆえ
勿論もゆえゆえて神ゆえ
ゆえゆえ好物の梅ハ花の白ハ
青ゆえ卓散ゆえ来て燒失ゆえ
これハ昔ゆえ山の動ぬゆえ
の四ハ呑空ハ何が生の紅葉をゆえ薄ゆえ

まつくらなる夕暮、宮こへ歩むべき海をさしてこぎ出
ぬ。やうやうくれて火を結ぶ。陽よをくだりてもくれ
しぎや。茨京の神祭りとはいふ。ほんの俤り。煙て苦の海矣
茨の宮こをこそ。佐東の関家。ふるく思義
まつくら帝代のゆひをあり。去てはどらへんくも。物識
の義。知識人情の変化を案じ給へ。魑魅の乳
をかぞへく先くもつをなれ。ふ上ちよりさはよりくそ
ハ俤ありて。物ふその物さ。あくしふをとく和歌の可不可
を案じれども及ばうへ。計ぐく。無常のさひ思惟する未遠
なれば二度あるべき。妊娠かの已がある夕暮。京の風。一双べの
本の葉を吹よせ。体の存おかぶせり。和歌を拾ひ

あるくくなるハ。実枝事ひの桐の古葉よ。虫くひの言あり

いくとせう主い神ぐ　たくくの秋風を
つぶ身ふ　ふつくとぐるふき

とあるを。体つくくと山換じ。狐の狐。已ぐ不祷を好海
自ゆの恠りの目ぐ。京くうへ。ぐずの歌手ぐ。ぐるる女
らんくうとは。ふ。ふ。ふ。ふも見名を名ぐ千。紙よ。封。狐ぐ狐ぐ。ふと上
ぐ。ひ。潤女の角ふ入ぐ。ぐ。ぐ。

一休石火の答の〜ゆ

白川の高うふいて江師に万の男をしらぬかまく

ぶくぶくと是かはしらさぬ世一休の答ふ弱く見し

一問答せずぐるくおりひ苦もしぶ一休おふ〜ゆへ

をうくく火を打くく長ふ行ふよかの者ぐこれさいるあく

いうふ和尚

その火ハ石ゆあ鉄ようあるく

問ひ来〜すまバ和尚さらぬ〜ね祈るくおてくハ父の子ゆ

母ぐ子ゆ〜答くぶくハ山ど一句ゆ問ひ。二言も不出

く。蔵をかゝげ去りる

續一休和尚　巻之二　目録

○一休和尚を泥酔不清待〜答物の事

○一休和尚禅の老婆ぐ物語〜行ふ事

○蜷川新右ゆ一休対句〜行ふゆ

○一休和尚ま面の祈とも〜事

芳志広の金伊曽良ぐ密法神のゆ

○業人涼山宗春一休ょ粗六方ゆ〜事

○一休夫婦いさりひを粗言ゆく中率〜行ふゆ

○一休旅の書付を判ぐ行ふ事

續一休ものがたり　巻之二

○一休和尚を風流に清待し奇特の事

都の町人は扇屋助兵衛とて有得なる者なりしが、その身は浄土宗なれども一休和尚を帰依し、法名伝心脇ず仕へ申せ。元来器量の男なれば、ものごとに叶ひぬる事もなく、世を安楽に暮すやうに、限りなく欲しく思ひ、秋の風に月見まどゐ、やうく風の心地し、悩ましくすうらら暮くして、病をうけ、今は世の名残と思ひ、妻子眷属の歎き、世のつねならず、色くと醫療をも尽すとぞ。

ものよ、女房の涙のりきもとの芝居にて、妻子を枕もとへよびよせ、祈んの服を呑ませ、往生

すべしとぞ死さしべ且れ古の上人ぞれハ代く形み身り
ぞ宗旨の寺ぞれを形み身るすハ勿論ぞむくさき世
の一休和尚ぞ存生の内他人会ふく恢復しゆをばぞくお
形ゆ祖師よおさせ下さるく宗ふぞる教してゆべしと
方端坐る雪ぐいひ亜ぞ宜しく夕の口
よりてそれ茶常の雪ぞ坐ぞ坐ぞ坐

和尚ずつこと高き聲を振いて。ろうろうくと言聲を聞て。ろう弱人
ぱめーぎや。星てくもまこまひ下り。えのやく搖をすべ。雲た
ちまちふ消。爲神明もゆ。ゆ。法人。黄金の光ひを。ぱ
ぐく光ーこみりる。且物ちの住持。誠は一休と云ひ人の
まーくりる四へる社。ひ。ーき用ふ。ぱ。ぱ。ぱ

の毒うり。大分の金子をぬすみ取て。
うり。金のうめぶ事をゝひ。
宝ゝかゝんやゝ。ふゝこめ。扉
押ふせ。中乃。櫃を取
ゝ。ゝ寛人。後者ハ。
ぽゝ。ゝ。ゝ和尚の乃。
一休ゝ。ゝ社。ゝ。ゝ
事を。ゝ。ゝ。ゝ。
同ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ぬすゝ。ゝ。ゝ。

付バ僧ハ答ヘく枯木依寒岩三冬無暖氣といひてり。し
えハたゝし美人よ抱きてもゝ公ハ枯木の寒き岩に依
るやうく。その所ふ暖なる氣ハすこしもなきがめくんを動す
るやうしとなり。し女も常く禅法を学ぶ婆ゝ仕へ
ゝきるをも耳をとゝ聞て　ゆゑ。し老僧の禅法ハ
ゆメ見へ聞ず。所言をもつふ老婆よ指りをゝ婆大きふ怒
つゝ。今まゝ石を指りくるとゝ。ひ十年このうと
し信人ゝきの者を供養せし事の後ゝ。即時ふ
僧を遣おし。その事者を婆ゝ。し信の源樵を去
らず。婆ハよく清淨の指如をまもり。婆ゝ
し公を待ふ他つゝ石ゝ。即ち来をみく

老婆心爲賊過棕　清淨沙門與三女遊
今夜美人若約我　枯楊春老更生稊

婆ゝし詩をよく指るべし。その老僧も不可。婆も不加
ゝ。し公ハ所もなく不所もなゝし。侍のゆハむし
の婆ゝ。ゝゝハ盗人のたゝ林をうけ。遍ひ海をこらして
やうふ同じ。ゆハよ清淨なる沙門よ。婆ゝの女を与ゆゝこひ
美人来りてゝ。ゝゝ。ゝあよ紡来セバ枯ゝ楊なりとも
の末ゝの嫁を生ずこと。公ものゝ。ゝげ指よりびき。ゝをひ
えゝ。ゝんゝの侍の云味ゝの老僧ゝ枯木の暖ゝ指きゝ
ゝハ。ゝゝしとなり。ゝ一体の向ふ境界をうけく。ゝゝ。ゝ
遍照僧正のかくよバうゝいざゝてゝ。ゝんゝのゝゝ

是を推てしるべきく

○蜷川新左つよ一休発句しあつめる

さまのきぐさ秋ハ柚の淋しく。袁も淋きわりしぱ二ゐる小止も

あきゐの肉つまぐいて食でゝく。落ル新左ハ一休の房室ニ

居ひ。四方八方の柚落りして。ひ人の夜中と芳さんしてわりひ

ゐく。淋と居ゐ。あり素肉とき人ハ和ゐも同じ山。袁猿電

ゐ蜂んでハわりひ腸をゐろ。物さびしく。ゐ立すわりゐつ祝く

お新ゐ入の。落ル新左ゐとひふとゐの。公特しく。ゐ家ゐひ。ひ人

ハ一入秋の公。愁の字の義理。叶ひ淋しうてゐ。ねこよく社

ハ。ゐれゐり。まゐゐゐ。ゐ行ゐく。新左ゐもやゐて奥

ゐ。ゐり。和ゐゐ。鳥をつき合てのあ行。行やくゐの浮世の

ふ新左ゐ。ゐくハ。ひと。ひ人。第ゐたゐく人の。ゐ。行

ゐハ。ゐ。ゐ。女の声ゐ。ゐ。ゐハ。ゐ。ゐ。ひ罵。ゐ行。ゐ。ゐく

立ゐ。ゐ。ゐ。ふ。姑の嫁をやゐげ。ゐ。ゐ。ひのゐ。ゐ

行ゐ。物もいゐ。ゐ。ゐ。世ゐ。姑ゐ。ゐ。ゐの嫁ゐ。ゐ。ゐ。ハ。ゐ

ひハ。ゐ。ゐ。ゐ

なれど仏はうかるもあるべくもあらず

時間　鳴看経　叶心

うぐいすの。彩なる声は。梅も見ハ名聚りの。一句の
内ふるる禅法。寂莫の理禅の心もこうり。尋すれ
ば文字の意ハ誠よりき住新ぺつをよかくり見ハ
有ぐさきの秀句。ふる友ぐちの内ふかる事をゆ
て。真実ふる楽しみとする者の行まハどき大慶哉
くふるもく社人お縁りてけるく。思すく好び
ぺくろ紙よりつけ。ひとり仏ふりくろ。足疾
よ家をそ。ゆくまりる
○一休和尚よ夏の初を句しる

并志ヶの法伊賀良が後法神の
陽火法よかつ河ハ干魃して。法本を痛め五穀をあが
し。陸水陽よかつ河ハ洪水して。江河よ溢き人家を
毀つる。陸陽の合躰和ぜざるゆえ。まろふ天災とハ
いひぐ。と年いつる年やうん。三月の末ゆ照あし
六月の中まぐ一滴の雨ひもなく。耕作業をうと
する。ふくの百姓天を仰き歎きるし。稍くの茶りを
の。わしゆる夏ものくるを。ふくもぐも。いか一天よ
抜くさ行の雲もなく。容易く降べき祈も見ぐぎも
ぐり。家よ草ぼの片和よ。百姓ども。おろういつくハ
わきど。ぼの田畑。ふるるよハ山田のまぺ。ぐ水の

便あるべく。夫よりつゝ祭ば宮子に一盃の水もあべきところ
更にあるべきようして面白をし。責て一盃なりともやべゆ
地の間ひとも成べきよし。洋義まちくの所に一人の百姓
のいくらばかりの年貢の地義の用眼をさまし。京の大
徳寺の一休和尚いとへ下り給へらく。扨おは常ふ為り給
ひしに。まれ〳〵いおよくん紀亜さ迄。遠行をは欲き
をいひ。面の形をお形やさんとふよ。村中是ば一度と
もらはして。大勢一休の迹をたゝひ遠ゆけしがつあるに
田村川のほとりにて遠行やすくれ神よこあつき。きろく
のよしを欲き。何るも仏道遊ゆ人ぱひさすゝ形さ為
すうまく。面の形をあゝ方されよゝと。大地よかゝべを

あゝべくとゝそ。一休おゝしく云ゝく。とゝ形ゝ人を佛とする
るハ。とつゝ淡合もあるべき。面の形ハ不ばるとあるの空間
これハ上よりあれ。こまく形て見るべし作れ。形るん
しきゝ形へを。大勢ゝを。是ばゝくゝ。お形やゝ
一休もきゝ形ひゝくゝ。是ばゝくゝ。お形やゝ
近ゆもおりれば面なり年ゝを。仏ゝ。面ゝ方も
ゝ。ゝきゝゝばゝ紙を。立て氏神ゝ形む神の
社壇へ納めくゝ。立ゝ一年中くゝ。
百姓ども収びゝく。村中の。名へ大の紙
を日々をれば

面がゝねゝ。百姓ども雑俵の俵をあゝを

ども。大海へ蜆貝の一二粒で行程ぶ。天も花を不便
ふ杉りひ。昂ひの浪を二三ちがひ行人
うで出れども。美へきもくぐる交言ども。かやうのうまく友の
涉へきこと。杉りひもうぶ。帰るこの言ひしが。その
中ふまうがきこの。いやいや生の美の北義の軍眼和尚
をハ猛きー四人。村中へこの出帝り。的伝ども。志ひしがみ
おの紙と言ぐこの。ー。雑ふハ法不の達沙。花神とひ
みーせバいふも信仏ま細めまーひりる紙ふいこ友ぶも
しいふ者もまく。その日社壇人紙めりふ。考ごとなこ
くとり新の文ひりあくる月の考りまて。車神を流
て大雨みり。法未桜を深。田舞も深りまりその一村

のーるーずくとる出近この百姓の浪び。天も紙更まーく
しや。波ふみきの例へされバ一休今のま紙の四ふ天も
勝の浪をぶーふくー来れーるその湿あきふーもわー
ぶこのうー三然那ふ雲法法帥して。法杉紙の俗ふり
行俗産所梅ーぶがのひ紙を演渉れーぶ。三紙一世の
山ふ山ふ深ずくまりん。法ふ杉ーー家ふを捨てそ少ふ大れ
涉ーるこぶこのふ任考良ど浪ふ来り。ぶ人屋されりこ
前ハ大海深くー白浪ふ。法ハ歳杉そどーら考の声
強ふ物ーびーー来ふ水ハ変社ふ保べき国屋の北人
しやーくふき考ふを待び。日夜朝考ふのー法妻紙を
ーみ。偶紙ーーて杉ーもーふ。ある人考ーて勝き毒ーも

の香ゆかしく鼻に入るにつけ恐れ一心に法華経を
ゝみ奉るゝ所に。数ま[illegible]の[illegible]後ひ風をげしく相
ゝ[illegible]その臭き気煙のめくるまにく。ぐくとうごく勇の
ゝまで。やがて[illegible]とぞ[illegible]しされば往一つの大地獄
法[illegible]ゝ[illegible]紅の舌ゝ[illegible]の[illegible]
を[illegible]と嚙ゝ[illegible]されば[illegible]公地もかゝる
河ゝ[illegible]一心不乱に法華経を[illegible]
ゝ[illegible]ゝの大地獄[illegible]獄湯の声を聞くとひしく
怨に信心を起し。悪念をかへ口を閉角をかさ
て良ゝ[illegible]く法華経を[illegible]てゝ[illegible]
ふゝ[illegible]ゝ人間ふつ[illegible]物ゝ[illegible]

ふみ百風をげーく。谷も鶯なき山も谷くゝ神のるがゝ
そのまゝ賜ぼもきよゝふさゝおさゝふその柄亂なき
東常の人まり海ひ。かの云浄を礼し。ゝれハ山海さ
多ゝくすむ悪逆ゝ。学ぶ人書をみく食物と
し飢を助くゝ。ゝれハその罪いくゝくゝ。廣大のゝ小分
まかくもお仏の懺悔を聴耳ゝ。無業忽消滅ゝ
ゝれしこ衆の大願ゝ。天の百よあゝ。ゝ五ゝ法を
て。阿弥の信仏をのしゝ。罪を滅す感涙ゝ。山涙の鞭ゝき
をゝくゝ形の大きを計り志重今ゝ。てハかゝ悪
業をのすゝゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ
ゝ仏ゝ虎の虎ハ鴻ゝ。ゝゝ。毒蛇のゝゝハ。ゝゝ

背負ゝまゝくゝ。ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ
れん。行信公堅固ゝ。懺悔怠もゝゝ。ゝゝ。ゝハ龍神
阿弥の涙。その抜ゝ山根を泣ひ。大盤石をも深ゝする程の
涙水。流ゝゝ。ゝゝ法師の書物も。ゝゝゝ程の
籠ゝおゝゝ。又一休和尚のお手紙ゝ。一日一度感涙をゝ
ゝゝ。龍神も。ゝゝハ伊曽良嶽ゝ。ゝゝハ。ゝゝ
ゝ祈ハ。龍神の内でも。ゝゝ。仲弓の。難陀龍王と
いつゝゝゝ。

○茶人源山宗春一休ゝ相談ゝゝ

都の東要寺といつゝ。源山宗春ゝ茶人ゝ。一休の活
ゝゝまゝゝを信。ゝゝ暑を同ひ。蒲ゝゝく

おくれしるし。此ハ弥生のすゑ永き日の芳ばしきかぜ。
含める花も稀なる四人。東の果の異国を立出。西の果の法
世界に至る。一休の事を尋ね。小夜の橋も年経るゝ。扉を
たゝき訪ふ。一休もおどろく。花さく春にて春して
ハ。身の一生に一回。七年来宝の赤ハ根より咲るゝ。冰さゝ紅
の。深山宗春氏ハ。ちらさじ。ちらさじ。はるまつ。春
の紙。湯も都の西。おろ。ゝ。ゝ。ゝ

戀切なるハ志ゝ深ゝ。されゝハ春ハ花の薫しき香を
思ひ。秋ハ紅葉の色まさきを愛し。ぞかくるものゝ心
を動すゝくゝ爲人なり。風ハ宗春きさくハ春ゝバかゝも
無ハ春無バ春無の題をおし寄ゝ。お風ハ狂句を糧
ぐゝ後ゝくゝいひ題ゝ。ゆゝいわゝ。後べきゝハあ
らゞも。まづ題をかゝれゝ作ゝ。宗春歌ゝぞ
おこれゝる。れ当ゝ入ます

△見戀

小夜頭のゝれねわゝたゝひやきゝのん
ゝゝふ　月の欲　ぞんのみのゝ

△契戀

△別戀

ゝもふゝゝりゞ人ハなゞすゝも
今ゝハゝのゝよぞむつゝも
ゝどつきやねゝわゝ逢いそぐゝ

△後朝戀

ゝゝ逢ゝ一ゝ逢ゝひゝゝゝ
けゝくゝくゝゝひみゞゝ

△片思

君ゞゝくゝばゝきゝりのてゝちんゝ
月をつゞゝのかゝゝりひゝ

△寄月恋

きりぎりすとゝねぬ夜すがらてる月の
かつゝれとゝハ　きみが　撰用ら

△寄井恋

ゝるまゝ井のはゝぐべのおもゝ一すぢふ
かりくゝ　むもたゝ　ぐ　ぐりあハぬん

△寄松恋

ゝきよしのきしゆせがりふ祈ぐよして
やゝうきんハ　まつよ　きのどく

ゝ八百しもふ助無ゝすで　松ぐゝりる。宗春ゝくぐ出家
ゝ無すくも其仏ゝ。法よ　僧人よあゝ祈ば。僧の鬼ゝバ志ゝ

ゝじゝハ宣ゝじゝもかく悪の歌の一首ゝ。その意味の深きゝ
よがゝゆゝ清浦が河ゝよ。修練未熟の人も。ふぐ深坊ゝ祈ひ
らゝし来よ付て。ハ玄妙ゝ。その物の義逸もみゝらのゝ。ゝん良の
親ゝこの。あゝ母ハ東ゝ。ゝ神ゝ。ゝ。曽丹がゆゝの戸の前ゝ。卒ま
ゝ。ハ和ゝ。ゝ。恵能ゝ。ゝ。人のゝもある。ゝ。ゝ。ゝ。ゝれ者ハ。
不ゝど仏ゝよゝゝの入ゝ悪ゝ。ゝ。ゝねゝすゝも。ゝの執公の深きゝ
物上をきゝてのゝ。ゝ。ゝ。

くれぐれまでまつ人ぞ来ぬ夜ぞ長き　と歌しまつりぬ。

とかくするうち、行ふ夫婦も形のみ八一休の言ふ通り、絵目中法を守り。又如者も彩る色方へ公安く乃ち行ひ、さて色彩る色よりづつ寧の生活。て中も七〇七才田畑も多く形へ祖ふ仏の力なくもぬるゆく公のまゝなる者しばる人数一〇いるゆる。乞も妙なり質朴なく乃労環なきく人なりしが、いかなる事みや河れりて夫婦いさらひし。第日づるこなふ和をもいくず。就をみり合く事ばいろ夫月ハ一二度づもあるが。又いつくく中垂り。かくのめくなる色ばよハ縁者内の者まで也。又いつもの癖ふ和こもを行ふ。たゞ物人者もなくその垂まで通り行るが。

一休彩く垂く人乃を行ふ。又夫婦の人何しゆん行しき部紙ふてみ一をふ和者物ハ。何の物癖こ和きこんこゝ垂行ひ。何くこのくこ産ふみ行ひ。乃ハ夫婦人七こ形くきるゆ垂て来れり。どくくこれすく行りるわ一ふ二人ハ何るゆみやく。和者の傍へ来るこゆ。形くくゆ垂てけくこるふもあくば。なる人三の一ゆを八一枚の孫弟る。男女のゆふくせくくれすく形のしまく。安きこゆ垂清人ふこりぬ身こちまねぱ。言を乃く行くるべ。上の白ハ彩く垂へ来くをを。下の白ハこるくこくく。言一ゆを二ゆこゆけ。よく部でて夫婦ゆ濁く。浮く強てくゆ。やこまくゆれバ。拗俗を部ぜ一まくけく。これをこゆひ

源氏よりはじめ。こゝろ風よりこゝろ。ぺてーまでかきくれ給ふ。
すくもに人は見てをれども。ぐれ〳〵くれられば。夫婦は
仏の。堪合。い〳〵安きのうち。すゑ社。ゆるしあるも。
へハ。猿〳〵のいのちを。お世話よりはかどく。猿扱し
くつい。ゑらいすのゆ。飛走。れるも。深切のかどる。
よ。い〳〵れ。物いひなざひして。ゆきを。ふりうち
新〳〵。惡。夫婦。龍をゆり。合。わり〳〵。ゑれば。れる。ゆ。ゆきを。よ
返。すゝも。その。云の。ゆ。もの。ぺてーく。見も。ゑ。ぐ。ども。ゆく
源氏。更。よ。及。しゝ。ば。新〳〵。惡。ハ。書。の。ゆ。ゆきを。よ。ゆ。和。者。の
ゆ〳〵。垂。ゆ。〳〵。云。の。ゆ。〳〵。ゆ。ハ。恥。む。べ。り。垂。料。紙。硯。を。く
ゆ。れ。ゆ。〳〵。いよ。書。ハ。惡。も。ゆ。〳〵。の。封。じ。ゆ。菓。〳〵。料

紙を丸めつき紙ぽうんをしてみるぐ〳〵。寵より下の白を抜
てゑん丸ハ

いさりいさく　ようのちぎりき

〳〵あつ〳〵ゆかりくるれ下の白りる。いりる上のるゆん
るく実ますれ〳〵形ゆ。彩〳〵恵も射〳〵をときてゑれば
たぶなすとすゆ〳〵しいハなし〳〵よわうをする
〳〵あるりまし。筆ををあはくく見をく。物もれり〳〵き上の
白るゆ。いりる下の白やう〳〵ゑ〳〵〳〵とハれりひるぐう
上の白をはく〳〵やく。物をもいとず書のあ〳〵はし
おすず書も形てかの下の白を去後うぽくて生物を
ゆう。一変ようぽずるゆ

たぶ形すゆ〳〵はのふわうをする
いはうしすぎてよりのちぎりき

〳〵あるりを丸ハ生物ハ去ぐ〳〵く物をもいとだ。孫へをみて
つ〳〵ぶぽゆ形をゑ合くれ〳〵く多ひゆ。かの孫多ど
ハ下より丸て形〳〵悪書るゆむうひ。ぽれ〳〵ゑてるぐ〳〵ぐの
ひに後のを〳〵ゑ形ひぽれ〳〵いてすゆゆをるをれて
の白戯を丸ぶかくハる丸〳〵をぽ。ぶのゆをくくのれ教訓ぽゆ
始ねうるゆれども。ゆがうきいゆよ社〳〵いハ書も今ハ
ゆうけ流よ形ゆ〳〵ねのひひるきうるをぽく〳〵ゆ。書
ず。形てかくいとずて永さをゆゆるぐさよ。ぽうん
ぽるゆ人ゆの後もぐぐ〳〵ぽぽひぐきゆうぐ行ん〳〵

それなる支度をやうく。世を睡まくぐるなる。流よを弱ある
支度いさうひの扱ひ。そのむしーの人の乳母人実見まる
形しなの人も。生ねが律義母人ぶれるの作法もそあるべ
ぶふも正直殊勝なる例ぞ。

○一休雅の表付を判じ給ふる

一休和尚の若年の人へ。若年なる人口人へいらやしく和尚に問
ひを掛ふ。弱年なるもそこき事作りて。まるこ物さぐくいひ
合ふ。一休又答ひ。俗の乳やこん。ぜうく是へと作りふ俗
うのしふへなり上り。人の男やりるハ。きみち人。若方。一条の
礼の辻の門掛ふ。つぎなる事を紙に書うよみく見んれ
ども。懐ぐうく合点がまるずそれ母人写うえくまうべっ

ある事やこん教へ給へといひ。懐やうちうち物をそれかし
和尚のまんよりし出すふ

鼻

鬼の酒入　　三の虞淵ひ　　新社
おにのふくろ　　くまの紙　　糸をひく
無紙仕ふ。すかもち者ハ
上つん生バ生給へなのーむ長うずみ
鶏　うう　すぐる　物　ようみうう
ようりハ蓋ぐ　蓋ぐ　物をくひうう
お行　風　風　炮烙　まくし
下でを十千と千づ　十　合せ

まいのしいつくハ　久さまさまより

とのたまはれバ。休庵も行ゝび笑ゐやがひ。梅もさうり。ゑび蓮を
わるうねあるゝ。うりとくハ。ゝどゝるゝ人ゝくるゝ。是能の素紙の古付
うり。紙うり。濃きうすゝ。ゝ。ゝ。

ハ始して学さんおろく人百こゝて字をおぼくる筆ゝうぞの教ゑを
合人くゝ字己ノ〳〵ぐ初のゝくゝよりをく拾ふるゆて解ゝこゝぞ
ぞの学るよ仏をとゝまるく人ハ百ハ月ゝ前ゝくゝて人ゆゝとゝまゝ神ゑハ
百ハ角ゝ角ゝおゝるゝおゝるゝゝくゝゝるゝゝるゝゝくゝ法家の乃場
場ゝゝゝ